

どうして《朝顔まつり》の時期に 朝顔がいっせいに咲くの？



入谷の《朝顔まつり》には毎年約10万鉢の朝顔が並びますが、そのうちの7割ほどが江戸川区内で栽培されたものです。昭和23(1948)年に《朝顔まつり》が復活するとき、いつも入谷までリヤカーを引いて花を売りにきていた鹿骨の花園芸農家に、朝顔を提供してくれるよう呼びかけたことがはじまりだそうです。

もともと朝顔は8月になってから咲くので、7月上旬はまだ花がありません。そこをなんとか市が立つ七夕の時期に咲かせようと、鹿骨の生産者が工夫をかさねて、20年ほど前から《朝顔まつり》の日に花が咲きそろうようになってきました。たとえば5月下旬に3日間ほど、夕方にならないうちにハウスに日よけをかけ、朝9時過ぎまで中を暗くすると、朝顔は夏至が過ぎて夜が長くなってきたのかと勘違いをして、早く花をつけるのだそうです。

《朝顔まつり》の日にちょうど花が咲くようになったことで、ますます多くの人がおとずれるようになり、東京の夏のはじまりをつげる風物詩として有名になりました。



▲《朝顔まつり》に並ぶ鉢の多くは、行灯づくりといって、周囲に差した支柱につるをまきつかせて花を咲かせます。この写真は昭和30(1955)年代、まだハウス栽培がなかった頃の朝顔づくりのもようです。

▼ハウス栽培が始まってからは、行灯づくりの作業もハウス内でやるようになりました。最近人気があるのは、4種類の苗を寄せ植えた行灯づくり。それぞれの支柱につるをまきつかせて、4色の花がひとつの鉢で楽しめるようにしています。

